レトリックとしてのコロナ禍(2)

――一般の人々の詩歌の分析から――

修士課程１年　福田　聖　博士課程３年　新井素子
修士課程２年　太齋　慧　特任研究員　堀内多恵
博士課程１年　江刺香奈　修士課程２年　若子静保
教授　能智正博

１　問題と目的

コロナ禍における急激な環境の変動は，感染への不安等人々に大きなストレスをもたらしている（厚生労働省，2020）。ストレスを避けるための対処には専門家による心理的な支援が役立つと思われるが，支援の前提として，人々がコロナやそれにまつわる現象をいかに意味づけているかを理解することが求められる。新型コロナウイルスに関する小池都知事の会見に対してディスコース分析を施した前稿では，為政者が状況や対象に合わせ「戦争メタファー」をはじめとするいくつかのレトリックを駆使している様子が示された。それに対し本稿は，そうしたレトリックを差し向けられている一般の人たちがどのように新型コロナやコロナ禍という状況を体験しているかを，人々のコロナに関するレトリックの検討により明らかにしようとするものである。

先行研究は，一般の人々でも，戦争メタファーだけでない多彩なレトリックでコロナが表現されていることを示唆してきた。戦争メタファーは治療など特定のトピックについて用いられることが多く，ソーシャル・ディスタンスの影響など他の面には「戦争」に代わり“Monster”，“Storm”，“Tsunami”といったメタファーが使われることを示唆する(Wicke & Bolognesi, 2020)。またコロナのメタファーとして「制限されている」，「落ち着かない」，「不確かさ／不明瞭さ」，「致命的／危険」，「苦闘」，「信仰／運命」，「超自然」というカテゴリが見出され，「不安・心配」，「リスク」，「進行」という３つのテーマに集約されている（Stanley, Zanin, Avalos, Tracy, & Town, 2021）。人々は，為政者やメディアの表現に影響を受けつつも独自のメタファーにより，未知の存在であったコロナに関するイメージを生成していると考えられる。

本研究では我が国において，一般の人々に見られるコロナやその状況に関する，より日常的な体験を研究対象とする。先行研究における分析対象は，Twitterへの投稿（Wicke et al., 2020），パンデミックについてのインタビューデータ（Stanley et al., 2021），コロナ禍のイメージに関する質問紙への回答（Gök & Kara, 2021）など多岐に渡る。しかし深い内省なく書いたり話したりした言葉は，独特の体験というよりも聞き慣れた言葉の繰り返しであることも多く，個々の個人的な体験における機微に迫ることは難しいかもしれない。

そこで今回は，人々がメディアに投稿する詩歌を分析対象とした。俳句や短歌といった短詩系文学は我が国では一般の人々の趣味になることも多く，特に俳句は広くとれば600万～700万人が作っているらしい（太下，2021）。短歌人口は俳句ほど多くないものの，同様にほとんどの主要な新聞・雑誌に投稿欄があり，俳句に次いで実作者の多い詩歌である。これらは日常生活と結びつき，日常実感を的確に表現すべく工夫を凝らしながら作られるものであり，作品を分析することで人々の新型コロナに関する表現やそこから生成される体験の特徴によりいっそう肉薄できると思われた。

以下では詩歌に用いられたレトリックの分析から，一般の人々が新型コロナやコロナ禍の状況をどのように捉えたのかを，その背後にある自己像／他者像も含めて明らかにすることを試みる。最終的には今回の分析結果を為政者からのそれとも比較しながら，コロナ禍における人々への心理的援助に役立つ知見を得ることを目指す。

２　方　法

分析対象

新型コロナウイルス感染症のパンデミックがWHOにより宣言された時期の前後から１年強の期間に発表された詩歌を分析対象とした。具体的には，「朝日俳壇」「朝日歌壇」（いずれも朝日新聞）に掲載された全ての俳句，短歌である。掲載紙である朝日新聞は販売部数約500万

部の全国紙であり，広範な投稿者を想定できる一方，読者層の特徴や詩歌の投稿を行う層の偏りについては結果の解釈において留意が必要であろう。

前稿における為政者の分析と同様，時系列的な推移を検討しやすくするため，分析にあたり便宜的に大まかな時期区分を設けた。WHOによるパンデミック宣言から第一波に伴う緊急事態宣言とその解除の時期にあたる第１期（2020年３月，６月），第三波の到来と東京の二度目の緊急事態宣言検討の時期にあたる第２期（2020年９月，12月），ワクチン接種の推進や東京の三度目の緊急事態宣言にあたる第３期（2021年３月，６月）という区分である。各時期の詳細については前稿を参照されたい。

分析手続き

分析は，第一～第三著者が中心となり，暫定的な結果を著者全体で検討し，そこでの意見を組み込みながら再分析するというサイクルを繰り返して行った。まず，コロナやコロナ状況に言及していると思われる句や歌を選択し，最終的に，第１期30句／30首，第２期18句／57首，第３期16句／53首を分析対象とした。

その上で，①メタファーをはじめとしたレトリックとそこに読みとれるイメージや捉え方に着目し，オープンコーディングを行なった。②そのなかで，メタファーの対象として，(a)新型コロナウイルスや感染症についてのレトリック，(b)コロナ禍という状況についてのレトリックが区別され，さらにそこで(c)自己像と他者像という観点が浮かび上がってきた。③さらに為政者発言の分析との比較も考慮に入れ，フーコー派ディスコース分析（Willig, 2001/ 2003）の観点を参考にコロナに関わるメタファーの意味や機能に着目し，(d)レトリック間の関連やレトリックが及ぼす影響についても考察した。④上記(a)～(d)の観点におけるレトリックの時間的推移についてストーリーラインを描いたうえで，期ごとの(a)～(d)の関わりについて考察した。

3　結果と考察

分析の結果として，新型コロナの感染状況や時間経過とともに，コロナに対する意味づけが変化し，それに伴って社会状況にも変化が見られるようになると同時に，そのなかを生きる自己像／他者像も変わっていくことが浮かび上がってきた。同時に，そうした自己像や他者像の変化はまたコロナのメタファーにも影響を与える相互の影響過程が認められた。以下では，上記の３つの各時期について，⑴コロナと人々，⑵自己と他者，⑶状況の見方，という３つの観点から述べる。

第１期（2020年３-６月）

コロナ・パンデミックの始まりの時期にあたる第１期は，コロナは未知の敵というイメージが強く，人々は無力な自分を感じつつ戦場である外の世界から引きこもる。また，コロナを自然災害や愚かな人類への警告とみなす様子もこの時期から認められる。

⑴　脅威としてのコロナと無力な人間　この時期の詩歌には，コロナを人類の「敵」，「獣」，「未知の生命」，「悪魔」，「放射性物質」，「火」に喩える事例が見られるが，特に多いのが為政者にも頻繁に出てくる戦争関連のそれである。コロナは人間に対する共通の「敵」とされ，「国難」「神経戦のごとく」「武器」等，戦いに結びつくメタファーは人々の詩歌にもよく見られる。「国難やコロナウイルス蔓延し戸惑う民衆は無明の闇に」（３月25日　清昭久）はその典型である。「国難」は戦時中によく使われた言葉だが，都知事の会見やメディアにも見られ，為政者も市民も似た認識を持っているようである。

戦争以外に災厄のメタファーが用いられており，いずれにしても個人には制御不能なものとしてコロナが捉えられている。「放射性物質」には不可視でコントロールする技術不足のために人類には打つ手がないことを示唆すると思われる。また，「ミクロの毒」，「地球全体汚染」，「拡散・再燃」，「どくどくと」いった表現には，毒物のような禍々しさのイメージがある。更に，「対岸の火事」や「飛び火」など「火」という表現からは，「火」が燃え移るように感染が広がることへの危惧がうかがわれる。

その他コロナを，意志をもって動く存在のように表現することもある。「牙」を持つ「猛威」である「獣」が人類の傍に「駆け巡る」，「忍び寄る」からは，「獣」であるコロナの牙で傷を負うことを怖れる気持ちが見て取れる。宇宙に由来する謎の「生命」や「命あるごとくふるまう」からは，コロナを未知ゆえの不気味さで捉えていることがうかがわれる。「キラー」というカタカナでの表現には，コロナを国外に由来する何かとする意識や島国である日本人的な感覚に加えて，この時期日本ではまだ感染が本格化していなかったことも関係している可能性がある。

⑵　他者への不信と籠もる自分　人々は，上記のようなコロナのイメージのもと，「不気味さにたじろぐ我ら」と表現されるようになす術を知らない人として自らを特徴づける。その自分を守ってくれるのは「医の戦士」としての医療従事者である。ここにも戦争メタファーが見られるが，そこで一般の人々はいわば銃後に隠れる無力な

存在で，戦えない自分は「ただただ篭る」ことしかできず，銃後の世界では相互不信感や不安感を覚える。コロナは外にいる敵であるばかりではなく，すでに自分と他者の間にあって人と人の関係を分断するものでもある。

相互不信に関連しているのは「感染者」の概念である。コロナ禍では「感染者」とラベリングされれば社会から「隔離」されるが，「感染者」かどうかは見た目ではわからず，親しい人との間でさえ「疑心暗鬼」が生じるし他者からは「被告」のように疑われる。「感冒もフェイクニュースもボーダーレス」のように感染に関する情報が錯綜し誤情報も飛び交うなかで，何を・誰を信じてよいかわからない世界を生きることになる。人々は他者の裏切りを「オセロのごと」く怖れ，周囲に不信感を抱いている状況がこれらの表現に反映されていると思われる。

この時期マスクに言及する詩歌も多く認められたが，マスクもまた人々の生きる世界を映す鏡になっている。「免罪符求めるように一箱のマスク求める」は，感染源になるかもしれないという原罪が，マスクという見かけ上の遮蔽物により免れる実感を示している。もっとも，マスクをしても「社会不安をマスクで防ぐ」と不安や不全感が払拭されるわけではない。例えば，「マスクとマスクの孤独」というように，それによって他者と隔てられ孤独になるという感覚も験されている。

⑶　侵食される世界と警告としてのコロナ　以上述べたような絡まり合ったメタファーのもとで，現在の世界や状況に関する比喩も独特の形をとる。しばしば，コロナという外圧による正常な状態からのずれを意味する言葉が用いられる。コロナは「ダブルパンチ」で人々の日常を攻撃し「物資や人情を壊す」もので，結果的に生活はコロナに「追い回されて行き場なし」と，自由な生活空間が狭くなっている実感が表現される。「歪み軋み」という言葉も使われており，圧力でつぶれかけた建物のように日常がイメージされていることがわかる。

ただそうした視線は，自分たちの生活に向けられるだけではなく，より俯瞰的な視点で詩歌に表現されることもある。例えば，「武器持てどコロナに勝てぬ地球人」（3月13日　弓崎真治子）と地球規模から詠んだ詩歌がみられる。別の歌では，「戸惑う民は無明の闇」と表現され，苦しみが自分やその周辺だけではなく，広い世界における「我々」に関わるものという認識も生まれている。

こうした状況の理解は，「敵」としてのコロナというイメージを強化するようにも見えるが，「我々」をどのように捉えるかによってそのニュアンスは異なってくる。例えば，「コロナ感染拡大の中でも紛争やめぬ人間」という句が含まれる歌は，コロナ・パンデミックがそれ以外の人間の愚かしさを意識する契機として機能することを示唆している。さらに進んで，コロナ禍が人類に対する「戒め」であり「警鐘」だという見方も生まれてくる。こうした見方は，災害もまた自然の一部と見なしがちな日本的な感性（松井，2013）ともつながるかもしれない。

第２期（2020年９-12月）

この時期は第２波から第３波にかかる時期であり，人々もコロナ禍の持続を観念し始めている。その持続性を伴う比喩とともに，コロナを厄介な隣人のように何とか対応し続けなければならない対象とみなし始める。日常生活の変化を否定的に体験する傍ら，その変化への慣れとともにレジリエントな自己像を表現し始めているように思われる。

⑴　コロナと人々：新たな日常を作り出す契機　この時期のコロナに関するメタファーとして，「波」という言葉が広まり，詩歌にも表現されるようになる。例えば，「コロナ禍の二波三波きて冬めけり」（12月13日　中村テルミ）というように，コロナ禍と季節のサイクルが重ねられる。そのなかで，「出て籠り籠りては出る年の逝く」（12月27日　土佐弘二）と，自分たちの姿も冬ごもりする動物を彷彿とさせるような表現で詠われる。このような時間意識のもとで，現在の生活の変化を実感したのかもしれない。「コロナ禍の前の映像どこの惑星」などといった形で，その距離感が表現されたりもしている。

実際，日常生活に対するコロナ禍の影響は非常に広汎である。年中行事の変化として「帰省せず手花火すべて残りをり」（９月20日　高田菲路），「火床減らした送り火」といった表現がある。行事以外でも，「布マスク300円も売られおり手作り茄子や胡瓜の側に」（９月20日　武暁），「ドライバーの体温計り」というように，さりげない日常の風景や，マスクや体温計といった衛生用品が日常に入り込む形で生活が変化する。変化の理由が感染予防であるせいか，コロナが原因でも，強い不安や怒り感情表現が伴うわけではないところが特徴的である。

コロナ対策の日常化はさらに新たな風俗も生み，生活の広がりに結びついていることに気づく人も出てくる。マスクやその他の新たなアイテムはファッションの一部である。「フェイスガードより見る世の中や息白し」（12月13日　伏見真砂尾）のように，それを身につけることでの体験の変化や発見が詠まれる。マスクを外す瞬間が発見となることもあれば（「立ち止まりマスクずらせば風は秋」（９月20日　秋岡実）等），そこに面白みが見いだされることもある（「片耳にマスクなびかせペダルこぐサーカスのような八月の朝」（９月20日　坊田貴子）等）。

日常生活の変化は行政のコロナ対策の結果という側面もあるが，それらの施策を人々は自らの日常にうまく取り込んでいるように見える。「これもまたリモート会話かもしれぬ本を読むこと，とりわけ古典」（９月６日　瀬口美子）からはその一部が垣間見られる。更に行政の施策やそれに関係するキャッチフレーズを逆手にとったユーモアも少なくない（「『宿題はまだステイホームしています』言い切る生徒の意外な機転」（９月27日　片野里名子）等）。コロナ禍を契機に強いられたり自ら変えていったりした日常に人々は適応し始めているようにも見える。

⑵　自己と他者：隔てられつつしたたかに生きる　しかし当然ながら，生活の全ての面に適応し新しい日常を構築しているわけでもない。コロナ蔓延防止のために課された空間移動の制限は親しい他者との隔たりをもたらし，それは人々にとって物足りない気分として持続的に体験される。「帰郷せぬ人に代りて墓洗ふ」（９月27日　三枝かずを），「娘にも孫にもずーっと会えていない楢山節考観ているわたし」（９月13日　黒川和子）などは世代間の物理的な交流の喪失を述べているが，それ以上に心理的な疎隔感の表現でもある。オンラインでの交流も工夫されるものの，「お互いに良い事だけを話題にし虚しく終わるオンライン帰省」（９月20日　池田桂子）など，そこに大事な何かが欠けている感覚を払拭できない。また会えない時間の長さがお互いの記憶の食い違いを生み出すこともある。「久々にタブレットにて会う母は別人のごとショートカットで」（９月27日　松本進）といった歌は，自分のなかの相手の記憶や相手のなかの自分の記憶が現実と隔たっていく様子を詠んでいる。

そうした隔てられた世界に生きることのストレスに対処するためであろうか，直接は関わりのない他者や見えない他者とのつながりを見出そうとする試みも散見された。「子は親を親は子供を気遣ひて新幹線はがらがらとなる」（９月６日　下道信雄）は，隔てられた空間こそつながりがあることの証明であると読み替えたものと言える。制限自体よりも制限下での交流の意義に焦点をあてたり（「大笑いマスク越しでも友のいる離れた机教室が好き」（９月27日　福井恒博）），制限がなくなると想定される将来から現在を見直すこともある（「来年は集まり歌う日もあれと年賀状には牛の群れ描く」(12月20日　塩田直也)）。いずれも，コロナウィルスとそれによって引き起こされた世界に対する心理的な適応の試みであろう。

このように，コロナ状況は持続してもそれに負けない強かでレジリエントな自己像が見られるようになってきたのもこの時期の１つの特徴かもしれない。他に，外出の自粛に関連した「不要不急」に対して，「農業に不要不急の文字はなし」と抵抗する自己を示し，「バスに並びバスを追い抜くウーバーイーツ　コロナの今を生きねばならぬ」（９月20日　大野紀代）のように制限ある社会で生き延びようとする人々の力を強調する歌も見られた。これらは逆境下でも生活していかなければならない自分たちの描写であるとともに，あるべき理想像の呈示とも思われる。それはまた，感染予防のための自粛要請を続ける政府への控えめな異議申立にもつながるように見える。

⑶　統制の強まる世界，それ対する適応と抵抗　この時期における状況として顕著なのが，国レベル・地方自治体レベルでの感染予防と患者対策が広がり日常化したことであろう。人々はそれに従って適応しようとする一方，批判や抵抗の気持ちも持ち，それも詩歌で題材としている。コロナの状況は，単にコロナという敵によって作りだされた戦争状態であるのみならず，その状態は行政の動きによっても作られているのである。

政府は様々な政策や規制を打ち出してきたが，人々はむしろそうした状況に無力感を覚え始めているところがあるのかもしれない。政策に従っても「七万人の失職者『越冬』という言葉を思う」(12月６日　篠原俊則）のように経済は悪化し，「看取りなく通夜葬儀無く斎場で骨壺の来る死者数の一」（９月20日　東川勝範）のように，死者も減少しないという状況が続く。こうした状況のもとで象徴的なのが，「羊」の喩えである。「マスクして羊の如く冬を往く」(12月20日　沖省三）のように「羊」に自分を重ねることで，状況に対して従順になっていることへの違和感や悲しみが表現されているように見える。ただ人々は，こうした無力さのなかに留まるとは限らない。先に力強く生きる自己像・他者像を示す詩歌を紹介したが，そうした状況への抵抗も詠まれており「お行儀の悪き政治が美しさなき事広めるマスク会食」(12月20日　斉藤千秋），「『Go Toはいいことだけど』序詞のように始まるコロナ対策」(12月20日　日比野和美）と政治や政策を揶揄する。政府やマスコミの出す情報に対する違和感や批判も「二千人以上の人が亡くなって政府首脳は殊更触れず」(12月20日　小島敦），あるいは「自殺者が増え始めているテレビではGo Toは得だとはしゃぎ続ける」(12月13日　野上卓）と表現される。そこには，政府やマスコミの姿勢だけではなく，従順な「羊」になってしまう自分に対する抵抗も見て取ることができる。

第３期（2021年３-６月）

第３期は，第４波の始まりでデルタ株による感染者が増えると同時に，コロナ・ワクチンの接種が開始された時期でもある。そうした対策方法の変化やコロナの属性

に関する知識の広がりとともに，コロナのメタファーにも変化が生まれている一方，政府の対策への批判は第２期から持続している。以下では主に，第３期に現れた新たな比喩やイメージについてまとめる。

⑴　医療による制圧の可能性と難しさの意識　国内でのコロナ感染者の出現から１年以上が経過し，感染防止の物理的な対策が定着したところで，コロナ・ワクチンが登場した。かつてワクチンが奏功した歴史を背景に，コロナも予防できるというイメージが広がったのであろう。その一方,「デルタ株」といった下位分類への言及も増え,「株」という増殖する植物のイメージも生まれている。新たな「株」にワクチンが効かない可能性も報道されるが，コロナという「敵」のイメージも変化しつつある。

そうした変化を典型的に示しているのが「コロナからスピンオフした変異株土竜叩きの土竜の如く」(６月６日　二宮正博）という歌である。モグラ叩きゲームでは，顔を出したモグラの頭をハンマーで叩けば，とりあえずそのモグラの頭を引っ込めさせることができる。ハンマーとはこの文脈ではワクチンのことである。モグラはそれほど凶暴に見えないしユーモラスな感じすら漂う。しかし，モグラは何匹もいて次々と顔を出し，退治する側は叩き続けなければならない。この状況の受け止め方は人それぞれだろうが，少なくとも第１期の「敵」とは随分イメージが違ったものになったことは理解できるだろう。

⑵　他者との相互不信と共感　この期では，救世主にも見える「ワクチン」を詠んだ詩歌が多く見られるが，皮肉なことに，そのワクチンが人々の間に差異や隔たりを生み出すとも感じられている。「接種終えた安堵の笑顔テレビ越しにまだ受けられぬ人々が見る」(６月20日　上田結香）からは，同じ一般人でも接種できるかどうかで区別が生じ，その後の命運もそれで決まるかのように受け止められているのがわかる。結果としてワクチンの争奪戦に加わる自分を憂い，芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を枕として「ワクチン求めかん陀多（かんだた）になる」と詠む例もある。コロナからの脱却の鍵になるはずのワクチンが，逆に人との間に断絶を作り出す実感が的確に表現されている。

ただ，そうした断絶を感じるほどに，その断絶の向こうにある他者に対する思いも強くなってくる場面もある。具体的には，若い世代や弱者が搾取されている状況に言及したり（「看護学生を送る学徒動員の如く」,「リストラは技能実習生から」等），景気悪化のしわ寄せを受ける人に思いを寄せたり（「ホームレス雇用破壊の生き証人重き荷抱き公園に寝る」(３月７日　梅田悦子）等）する。「無為徒食役に立たない私」なので「接種はビリで」よいとする，他者を優先する姿勢を歌にしている例すらある。

⑶　コロナ対策の社会への批判と離脱　この時期は１年延期された東京五輪の開催を前に，国も東京都も蔓延防止の徹底を叫んでいた時期である。様々な施策の一環にワクチン接種もあるわけだが，そうした施策とそれに伴う多様な制限のもとで，人々は行政に対する疑問や批判を詩歌のなかでも口にしている。ワクチン予約の電話がつながらない状況を「二日間に千五百二回電話」といった具体的数値を挙げて不満を吐露する短歌がその一例である。また，伝説の新獣で災いを払う「白沢（はくたく）」が徳のある為政者の治下にのみ現れると述べて，災いの対処が十分できていない行政を皮肉る歌も見られる。

ただ，第２期で見られたように，与えられた制限や条件に縛られた現状に注目し，そこに小さな幸せを見つけていくような適応方法をとる人も決して少なくない。「世の中はどうあれ」とか「孤独にも馴れし」などといった表現は，自分と社会を一旦切り離すというストラテジーの現れである。コロナ後に生まれた新たな習慣・ルールの下で行事を楽しむ様子もある（運動会で「はしりおえ（走り終え）マスクにもどる」とか,「マスクをとらぬルール」でも「楽し文化祭」とか)。そこでは，肩肘張らない自然なかたちで「コロナとの共生」あるいは「ウィズ・コロナ」が試みられているようにも見える。

４　総合考察

今回の分析において，コロナをめぐるレトリックの検討を通じ，人々のコロナ状況下の体験や，それにどう対処しようとしているのか，その一端が明らかになった。この総合考察では，本稿の結果からの知見を振り返りつつ前稿の結果と比較しながらその意味を考察する。

一般の人々に見られるコロナのメタファーの特徴

今回の２つの論考の中心的なテーマは，コロナのメタファーであった。全般的にみて，一般の人々の使うそれはバリエーションが相対的に多く，共通してみられるものはニュアンスが違ったりタイプが異なったりしていた。

戦争メタファーについて　先述の「戦争メタファー」が共通して使われており，海外の先行研究とも共通する。コロナ禍は全面的かつ急激に生じた災厄で，人類は対抗するだけの知識や経験をほとんど持っていなかった(村上，2022)。従来，人は疫病を敵とみなして医学的に戦い，克服してきた。有史以来戦争を繰り返した人類にとって，戦争は内外を問わず誰もがわかるメタファーな

のである。こうした歴史ゆえに，生命を脅かす戦争に類するものとコロナを捉えるメタファーが広く使われたと考えられる。

もっとも，戦争メタファーの使い方は人により微妙に異なる。海外の研究と日本の為政者の違いは前稿で論じたが，一般の人々ではそれに伴う自己像として不安で無力な自分が前面に出て，戦うのは医療従事者で自分は銃後にいるイメージが強い。それに対し，為政者は医療従事者を「前線の兵士」のように述べつつ，それを支援する指揮官に自らをポジショニングしているように見える。

自然災害，その他のメタファー　為政者も一般の人々も自然災害に関連する比喩を用いていた。これは「災害大国」と言われる我が国ならではのものだろう。しかし，自然災害のメタファーも，一般の人々と為政者とでは用いるニュアンスが異なると思われる。人々は，第２期には自然が時の経過でコロナを消してくれると期待し，第３期には政府の外出制限勧告を無視して自然に小さな喜びを求める旅に出るなど，災厄をもたらす自然のみならず癒しをもたらす自然も強調する。

もちろんコロナの体験は戦争や災害メタファーを超えて多様であり，一般の人々の詩歌からその多様性も見て取れる。戦争メタファーでは，コロナを外部の存在と仮定しにくい。SF映画で隣人が異星人にすり替わるものがあるが，コロナでは身近な人がいつの間にか「感染者」に変わる。そこでは，身近な人との連帯はむしろ難しくなり，逆に遠くの人との空想上の連帯でつながりの感覚を維持するしかない。また，「敵」にある人の意図は想像できるが，コロナの擬人化は難しいため「放射能」など意図性を伴わないメタファーが使われる。

一般の人々と為政者の違いの背景　以上のような違いが生じるのは，為政者という立場の特殊性と，データの属性によるところが大きいと思われる。都知事の語りは，都の新型コロナ対策を有効に進めるために人々を動かすという目的に沿った，「遂行的」(Austin, 1962/ 1978) なものにならざるをえない。オーディエンスはまさに，特定方向に動いてもらう対象である。それに対し人々の詩歌のオーディエンスは，新聞の読者，とりわけ詩歌に関心がある人々であろう。そこに遂行性がないとは言えないが，その目的は多様である。政治家が発言に慎重になりがちなことも背景の１つと考えられる。村上(2022)は，日本の政治家は発言の揚げ足取りを防ぐためにレトリックやユーモアを用いることが少ないという。為政者が表現に技巧を凝らすことは抑制されることになるだろう。

本分析の対象である詩歌は新聞に投稿されて採用されたものであることも理由の１つと考えられる。投稿者は目を惹く表現や新たな視点を求めて表現を工夫するため，その過程で多彩なメタファーが発見されたとも考えられる。複数の視座を持つことはユーモアの発生にもつながるだろうし，それが批判的に物事を見る契機にもなる（Hurley, Dennett, & Adams, Jr., 2011/ 2015）。そしてそれは，人々が普段の生活に取り紛れて見落とされていた細かな体験の想起にもつながっていると思われる。

コロナのメタファーの時系列的な変化

本分析では，時期や文脈により人々の用いるメタファーの変化にも注目した。コロナウィルスに関する知見の広がりや，対策が進み「敵」に負けない可能性が少し見えてきたこと，生活の変化に多少慣れたことなどを背景に，コロナへのメタファーも絶対的な力をもつ存在から，厄介だが対処可能な存在へと意味あいが変化している。これは杉山ら（2021）の調査結果とも一致する。変化に伴って人々の当初の不安や無力感も薄れ，自己の性質への認識も脆弱さからレジリエントなものに変わりつつあるように思われる。これは，行為主体性を高める点では好ましい変化だろう。ただ，周囲の人々との疎隔感とそれに伴う孤独感は続いており，それが積極的な対処行動の足かせになる可能性は否定できない。

ストレスへの適応過程　これらのメタファーやレトリックの変化は，ストレスへの適応過程を反映しているとも考えられる。人々はコロナへの恐怖→日常生活の変化，無力な自己像→力強い自己像というように緩やかにレトリックを変化させた。ストレスの評価は対処行動に対する再評価や環境の変化に応じて変化するため (Lazarus & Folkman, 1991/ 2004)，レトリックの変遷はストレス対処のプロセスと重なるであろう。

一般に人間はストレスにさらされると，①それを脅威として認知し，その後に②対処行動が生じ，③ストレス反応が起こる（Lazarus & Folkman, 1991/ 2004）。本結果の第１期でコロナは放射性物質などに模されたが，これは原爆や原発事故で犠牲者を出した歴史が社会的な言説として機能し，コロナと関連付けられたと思われる(①)。第２期以降，人々がコロナを日常化させつつユーモアを見せ，政治・社会的な場面から距離をとる行動を示したことは，ストレス状況に合わせて認知を適応させたことの表れのように見える。つまりそこで無力な自己像から脱し，この適応が更に進んで力強い自己像に至ったのである（②）。今回は③ストレス反応にはあまり言及がないが，詩歌の作者においては，対処行動によりストレスが軽減したのではないかと想像される。

他者像の変化について　このようなメタファーの変化

の理解において重要なのが，他者とのつながりや他者像である。コロナのような危機的状況では，しばしば人間の利己的な部分が前面に出る。第１期の感染リスク，第3期のワクチンの予約の困難さは，自分を脅かす他者像を生み出したように思われる。Gergen（2009/ 2020）は，個人の満足を最も重視する個人主義の浸透が西洋社会における他者への不信を深めたという。日本でも第二次大戦以後，西洋的な個人主義を１つの理想とする教育が行われたが，コロナ禍で生じた上記の状況は共同体における人のつながりを危うくさせるものであろう。本分析も人々がそこから相互不信の感覚をもったことを示唆する。

しかし今回の結果は，そうした状況下でも人々が迂回路を辿って他者とのつながりを確認しようとしたことも明らかにした。第１期では遠い世界の他者との「共苦の絆」を口にし，第２期では会えない家族や他者に思いを馳せ，第３期では共同体内部の他者の苦しみに目を向ける。Gergen（2009/ 2020）は，他者との関係を保つには対話的実践が重要と述べるが，コロナ状況下では直接の対話は難しい。今回の対象者もそうだが，他者を内面に取り込みつつ営まれる内的な対話は，他者像をより親和的なものに変える可能性がある。それで孤独感が払拭されないにせよ，人々が相互不信の場に閉じこもってはいないのは，この状況における１つの希望ではないだろうか。

臨床心理学的な意義と今後の展望

前稿と併せ今回のプロジェクトは，2019年以来続くコロナ禍が私たちにとってどんな意味として体験されているのかを，社会文化的な文脈のもとで捉えようとしたものである。発話の向こう側にそうした意味があるわけではなく，それは社会的な相互作用のもとで現れる（能智，2021）。政治家の発言や人々の詩歌は社会に向けて発せられたものだが，それまでの言葉のストックをもとに表出された表現は，様々なオーディエンスに受け止められ，広がっていく過程のなかで意味が生じ定着していく。

そうした個々の表現は，様々なポジションに語り手と聞き手を誘い，それが個人の感情や認知にも影響することになるだろう。人々に忍び寄る放射能のようなものとしてコロナを受け止めるとき，人は外部の世界を汚れたものとして活動を自粛するかもしれない。コロナを汚れた人類への警鐘とみなすなら，自他の行為に対する反省や批判により行動や対人関係を変えるかもしれない。そうした行動上の帰結が更に感情面に跳ね返り困り感になるならば，それはまた心理臨床に携わる者には無視できない。その困り感の起源を問い，「脱構築」し「再著述」していくことは（国重，2021），心理的な支援の方向として重要であり，今回の知見が利用できるところである。

その一方，本研究は対象としたデータは期間（2020年３月～2021年６月）や分析対象が限られており，別の期間や他の対象には当てはまらない可能性がある。国政に携わる閣僚，東京都以外の首長の発言の調査，新聞の投書やTwitterなど別の媒体を対象とした分析，海外の文芸（外国語の詩など）との比較により，今後より詳細な検討を進めていくことが求められる。

引用文献

Austin, J. L.（1962）. *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press（坂本百大（訳）(1978). 言語と行為　大修館）

Gergen, K. J.（2009）. *Relational being: Beyond self and community, first edition*. Oxford University Press.（鮫島輝美・東村智子（訳）(2020). 関係からはじまる――社会構成主義がひらく人間観　京都：ナカニシヤ出版）

Gök, A., & Kara, A.（2022）. Individuals' conceptions of COVID-19 pandemic through metaphor analysis. *Current Psychology*, *41*(1), 449-458.

Hurley, M. M., Dennett, D.C. & Adams, Jr., R. B.（2011）. *Inside jokes: Using humor to reserve-engineer the mind*. MA: Massachusetts Institute of Technology.（片岡宏仁（訳）(2015). ヒトはなぜ笑うのか――ユーモアが存在する理由. 勁草書房）

厚生労働省（2020）新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査結果概要について Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/syousai.pdf（2022年２月14日）

国重浩一（2021）. ナラティヴ・セラピーの実践――支配的なディスコースの脱構築　能智正博・大塚靖史（編）ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学――理論・研究・支援のために（pp.210-230）　新曜社

Lazarus, R.S. & Folkman, S.（1984）. *Stress, appraisal, and coping*. NY: Springer Publishing Company.（本明寛・春木豊・織田正美（訳）(1991). ストレスの心理学――認知的評価と対処の研究　実務教育出版社）

松井一洋（2013）.「日本人の災害観と防災文化」再考　広島経済大学研究論集，36(3), 1-15.

村上陽一郎（2022）. エリートと教養――ポストコロナの日本考　中公新書ラクレ

能智正博（2021）. 序にかえて. 能智正博・大塚靖史（編）

ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学――理論・研究・支援のために（pp.3-17）新曜社
太下義之（2021）．コモンズとしての俳句.Retrieved from https://active-archipelago.com/column/commonshaiku　(2022年２月10日)
Stanley, B. L., Zanin, A. C., Avalos, B. L., Tracy, S. J., & Town, S. (2021). Collective emotion during collective trauma: A metaphor analysis of the COVID-19 pandemic. *Qualitative Health Research*, *31*(10), 1890-1903.
杉山翔吾・廣康衣理紗まり・野村圭史・林正道・四本裕子（2021）．外出規制が孤独感・不安・抑うつに及ぼす影響――日本在住者を対象とした縦断的研究――心理学研究，92(5),397-407.
Wicke, P., & Bolognesi, M. M. (2020). Framing COVID-19: How we conceptualize and discuss the pandemic on Twitter. *PloS one*, *15*(9), e0240010.
Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham: Open University Press.（上淵寿・小松孝至・大家まゆみ（訳）(2003)．心理学のための質的研究法入門――創造的な探求に向けて――　培風館）

（指導教員　能智正博教授）